

Katherine Mansfield の従姉 Elizabeth von Arnim

——従姉妹の文学と人生観の比較研究——

手塚 裕子*

Katherine Mansfield's Cousin, Elizabeth von Arnim

—A Study on their Works and Lives—

Yuko TEZUKA

Abstract

Katherine Mansfield's cousin, Elizabeth von Arnim was a well-known author of twenty-one popular works of fiction, including *Elizabeth and Her German Garden*, which was a bestseller. Although after her death her books were forgotten and ignored for a long time, today's literary feminist movement has begun to rediscover them. In this paper, I would like to reassess Elizabeth both as an innovator of feminist fiction and as a role-model for Katherine Mansfield who was twenty-two years her junior. First, I will make an inquiry into Elizabeth's life and works. She led an adventurous life and her works conveyed some strong feminist ideas. Second, I will discuss the relationship between Elizabeth and Katherine. Elizabeth, who had played a role-model for young Katherine, turned out to be her admirer. In a sense she supported and 'hatched' Katherine Mansfield. Third, I would like to make a comparison between them, clarifying their characteristics; that is Elizabeth as 'a brilliant amateur,' and Katherine as 'a born professional'.

Key words: Katherine Mansfield, Elizabeth von Arnim, Feminism

はじめに

Katherine Mansfield の従姉, Elizabeth von Arnim 伯爵夫人 (後に Russell 伯爵夫人) は, ベストセラーとなった *Elizabeth and Her German Garden*¹ をはじめ 21 の長編小説の著者として広く

*助教授 英文学

世に知られ、夫の死後はスイスに移り、H.G. WellsやSomerset Maughamなどの有名な文学者が集うサロンの女主人として君臨し、Bertrand Russellの兄、Russell伯爵との再婚と離婚騒動で社交界を賑やかした有名人である。

生前のKatherine Mansfieldは、文芸批評家から高い評価を受けてはいたが、実験的な手法や前衛的な作風のため、一般読者から敬遠されあまり本も売れず、病気と貧困に苦しみながら短い生涯を終えたが、Elizabethは、富と名誉を欲しいままにし、健康にも恵まれ75歳まで華やかな人生をまっとうする。おそらく当時の人々にとって、Katherine Mansfieldより従姉Elizabethの方が、よく知られた作家であったに違いない。

しかしながらMansfieldは、死後、名声がますます高まり、今日では20世紀を代表する短編小説家としての地位を確立するに至ったが、一方、Elizabethはベストセラー作家の常として、死後、人気は急速に衰え、全ての作品は絶版となり、ただ、わずかにMansfieldの伝記の中で、「有名だったが、結局は二流作家の従姉」として、名残りを留めるのみとなった。

こうしてElizabeth von Arnimの名は、50年近くの間、すっかり忘れられていたが、1980年代後半からのフェミニズム文芸批評家たちによる、埋没した女性作家の再発見、再評価運動の盛り上がりによって、再び注目を集め始めた。

ヴィラーゴ社はVirago Modern Classics²のシリーズの中で、1985年、*Elizabeth and Her German Garden*のリプリント版を発行し、これは2000年の現在までに11回増刷され、その他8つの作品のリプリント版も好調に売れ行きを伸ばしている。Elizabethの人気回復に歩調を合わせて、1986年、Karen Usborneが伝記‘*Elizabeth*’³を出版し、1994年には、批評家、Jane Eldridge Millerが、*Rebel Women: Feminism, Modernism and the Edwardian Novel*の中で、「驚くべきことに、エドワード朝の結婚問題小説のもっとも優れた作品は、ヨーロッパに住むオーストラリア女性によって書かれた」⁴と記し、Elizabethの作品がフェミニズム文学の系譜の中で重要な位置を占めていることを明らかにした。

本稿の目的は、まず最初に、Elizabethの伝記と作品を読み、彼女がどのような人生を生き、どのような作品を書き、どのような問題を提起してフェミニズムに貢献したかを明らかにし、次に、ElizabethとKatherineの実際の交際について調べ、同じ一族の血を引く女性として、二人がどのように共感し、それぞれの文学と人生にどのような影響を与えあっていたのかを考察し、最後にこの従姉妹同士の女性の文学作品を比較研究することによって、Elizabeth, Katherine,それぞれの文学の本質に迫りたいと考える。

1. von Arnim 伯爵夫人としての Elizabeth

Elizabeth の結婚前の名は、Mary Annette Beauchamp といい、1866 年、オーストラリアの裕福な実業家の末娘として生まれる。彼女の父親、Henry Heron Beauchamp の弟 Arthur は、Kathleen Beauchamp (のちの Katherine Mansfield) の祖父にあたる。冒険と変化を求める Beauchamp 兄弟は、19 世紀半ば、相次いでイギリスを飛び出し、新大陸に渡り、二人とも一代で富を築く。1870 年、Elizabeth が 3 歳の時、Henry 一家はイギリスに帰国し、1872 年から 2 年間、一家はヨーロッパ大陸に渡り、スイスのローザンヌで過ごす。その後、再びイギリスに戻り、Elizabeth は私塾、Blythwood House と女学校の Queen's College School で外国語と文学と音楽を学び、Royal College of Music に進学して音楽を専攻し、コンサート・オルガニストとしての才能を認められる。Elizabeth は 19 世紀生まれの女性としては、かなり高いレベルの専門教育と国際的な教養を身につけて成長する。同様に従妹の Katherine も、3 年間の英国留学を許されるなど、かなり高い教育を受けていた。開拓者精神に富む Beauchamp 家の父親たちは、娘たちの教育についても進歩的であったと考えられる。このような高い教育と Beauchamp 家に共通するリベラルで冒険者的な気質が、Elizabeth と Katherine という従姉妹同士の女性作家の誕生に重要な役割を果たしていると言えよう。

1889 年 1 月、22 歳になる Elizabeth は父親と共にヨーロッパ大陸旅行に出発する。ローマの教会で Elizabeth はオルガン・コンサートを開くが、その聴衆の中に Henning von Arnim 伯爵がいた。妻を亡くしたばかりの伯爵は、自身もワーグナー家と親交のあった音楽好きであったので、この時、バッハを弾く若いオルガニストにすっかり心を奪われ、結婚を申し込む。父親の Henry は、年の離れた外国人の、しかも貴族との結婚に強く反対したが、結局、伯爵の粘り強い説得に折れる。1890 年、二人はロンドンで結婚式を挙げ、パリでハネムーンを過ごした後、首都ベルリンの伯爵邸に落ち着く。

オーストラリアの実業家の娘が、ローマの教会のオルガン・コンサートでドイツ貴族に見初められ、伯爵夫人となる。ここまでは、絵に描いたようなロマンチックなシンデレラ物語だったが、結婚後には、厳しい現実が待ち受けていた。古い慣習としきたりに縛られた貴族社会の中で、毎日のように開かれるパーティーや上流夫人たちとのおつきあいに、Elizabeth はすっかり退屈してしまい、その上、求婚中はあれほど優しくかった夫も、次第にプロシア人特有の頑固な専制君主に変貌していた。失意と幻滅の中で彼女は 3 人の娘を出産する。

1896 年、30 歳になる Elizabeth は、夫と共にポメラニアにある広大な伯爵領を訪れる。領地の屋敷は、伯爵が 25 年間放置したため、荒れ放題に荒れていたが、Elizabeth はドイツの深い

森に囲まれた17世紀の古い屋敷に魅了される。そして夫を説得してこの伯爵領に住み、廃墟のような屋敷と庭園を蘇らせ、地上の楽園を構築することに生き甲斐を見出す。

この庭園再生のプロセスを書き記したのが、処女作、*Elizabeth and Her German Garden*である。1898年9月、最初は匿名で出版されたが、瞬く間にベストセラーになり、年末までに11回増刷を重ね、彼女は1万ポンド（現在のお金では推定5千万円）の収入を得る。こうして幻滅したシンデレラは、庭園の中に幸福を見出し、自分の人生を取り戻し、小説家として再生する。庭園再生の物語は、妻としてでもなく母としてでもなく、一人の人間としての女性の再生の物語であった。恋愛と結婚の幻滅を乗り越え、人間としてたくましく生き抜く、大人の女性のための物語は、現代の読者にもアピールするものである。

2. *Elizabeth and Her German Garden*

Elizabeth and Her German Garden は、“May 7 th—I love my garden.”で始まり、翌年の4月18日、“just like the happy flowers I so much love.”という文で終わる。この作品は一年間の園芸記録の体裁をとって、明確なプロットはなく、小説というよりは、むしろエッセイ、日記、自伝に近い。“happy” “love” という語が繰り返され、自然の美しさを賛美する幸福で牧歌的な世界が繰り広げられる。しかしながらこの作品には、牧歌の伝統的なコンヴェンションである若い男女の無垢な恋愛はない。かわりに著者独特のフェミニズムが織り込まれているが、フェミニズムといっても、Elizabethのそれは、理論が先行する机上の空論ではなく、大地に根を下ろし、力強い生命力を持ち、牧歌と共存するような自然で素朴なフェミニズムである。たとえば、5月16日の頁には次のような記述が見られる。

May 16 th—The garden is the place I go for refuge and shelter, not the house. In the house are duties and annoyances, servants to exhort and admonish, furniture, and meals; but out there blessings crowd round me at every step.... (p. 33)

男にとって家は避難所であるが、女にとって家は義務を果たさねばならない仕事場である。家の束縛を嫌ったElizabethは庭に避難する。たとえ雷が鳴って他の人々が家の中に避難しても、彼女は家の外に飛び出すのだと主張する。

しかし実際に庭を作る過程で、しばしばElizabethは男の庭師の力を借りなくてはならず、庭師にうまく自分の意志を伝えられない歯がゆさに苛立ち、自分で鋤を使って土を掘る体力が

あればいいのと思う。さらに彼女は、「もしエデンの園のイヴが鋤を持っていて、その使い方を知っていたなら、楽園追放の事件は起こらなかったのではないか」(p. 26) と想像する。旧約聖書創世記によれば、神の創った楽園の中に、アダム肋骨から生まれたイヴは、ヘビの誘惑にだまされ、禁断の木の実を食べ、それをアダムにも食べさせ、楽園追放の原因を作る。それ以後、イヴの犯した原罪のため、女性の地位が貶められることになる。従って、「イヴが鋤を持っていたなら」という主張は、追放者イヴの手によって楽園を再構築し、女性の名誉を挽回したいという、きわめて大胆な発想の転換として読むこともできる。

Elizabeth and Her German Garden は、20 世紀におけるイギリス上流婦人のガーデニング・ブームの先駆けとなった本である。(彼女の後では、Vita Sackville-West のシンシングハースト城の庭園が有名である。) ガーデニングといえは、それまでは土にまみれて虫に触ったりする汚い仕事と考えられていたのが、なぜ急に上流婦人の間で流行したのだろうか。穿った見方をすれば、その背景には、「イヴの手による楽園再構築への願い」、つまり女性の名誉回復への願いが無意識のうちにも存在したのではないだろうか。

さて Elizabeth は、庭師の助けを借りながらも、なんとか自分の庭を作り上げていくが、彼女の傍らで、“the Man of Wrath” (憤りの人) と仇名される夫の伯爵は、旧態依然とした男尊女卑の主張を臆面もなく披露する。たとえば、「醜い女の子ほどよく勉強する」(p. 102), 「女家庭教師に不愉快なのが多いのは、みな結婚していないからだ」(p. 106), 「気の強い女はブスだ」(p. 142) などは序の口で、「ロシアの下層階級では、妻の愚痴を黙らせるために夫が妻を殴りたおすのは、“universal custom” である」(p. 80), 「しかも妻は殴られたためにいっそう夫を尊敬するようになる」(p. 81) など、Elizabeth や Irais が呆れ返っているのもかまわず、大まじめで語って聞かせる。“The Man of Wrath” は、自分の発言が響きをかっていることには全く気づかず、「ドイツの法律では、女は子供と馬鹿者と同様、政治的集会への参加を禁じられている」(p. 136) と得意気に付け足す。Elizabeth は彼の発言に皮肉なコメントを投げつけるが、正面からの論争には至らない。

“The Man of Wrath” の一連のアンチ・フェミニズム発言は、かえって Elizabeth の新しさを引き立てるのみである。彼女は古い価値観にしがみついたままの夫をやり過ごし、ひとりで庭に出て、美しい花の香りに包まれて、読書を楽しみながら幸福を実感する。夫と不毛な議論をするより、彼を置き去りにして、妻がひとりで幸福になるほうが、夫にとっては大きな打撃ではないだろうか。ある意味では、幸福でいることが最大の復讐になりうるのである。

3. Russell伯爵夫人としてのElizabeth

1910年、夫 von Arnim伯爵が急逝すると、Elizabethは屋敷を手放すことを余儀なくされ、5人の子供を連れて一時イギリスに帰国する。未亡人となったElizabethは、生まれながらのヴァイタリティを發揮して、今度はスイスのアルプス山麓の村ランドーニュに、眺望のすぐれた土地を買い、ポメラニアの庭園の再現に着手する。道路も水道もない土地に、“a house of happiness”を創造する程のたくましい行動力を、彼女は次のように説明する。「未亡人というのは身軽である。どんな変化も受け入れられる。妻である女性には思いもよらないような生き方や、住み方、住む場所を選ぶことができる。」⁵

スイスの家を建築している間、ElizabethはロンドンでH.G. Wellsとの恋愛を始めるが、これはRebecca Westの出現によって中断し、かわってRussell伯爵との恋が急速に進展し、1916年、彼と再婚する。しかしこの結婚は、先の結婚よりもさらに大きな失敗だった。求婚中は、魅力的な英国貴族だったFrancisが、結婚後、一転して子供のように自己中心的で、ケチな専制君主に変身してしまったのである。Elizabethは結婚後2ヶ月で、結婚の失敗に気づき、3年後に別居する。

ElizabethはFrancisとの結婚をモデルとして、1921年、小説*Vera*を発表する⁶。これを読んだ弟のBertrand Russellは、主人公Weymssの中に明らかに兄の面影を見出して驚き、自分の子供たちに、「決して小説家と結婚してはいけない」と厳命した⁷。Francis本人は、名誉毀損でElizabethを告訴すると脅かしたが、友人たちに引き留められて、ようやく思い止まった。スキャンダラスな話題で注目された*Vera*だったが、Katherine Mansfieldは、この作品をElizabethの最高の作品として評価した。“It (*Vera*) has been rather a mixed reception, but I think it's by far the most brilliant book she has ever written.”⁸

たしかに*Vera*は、*Elizabeth and Her German Garden*のナイーブさに比べると、微妙な恋愛心理の襞を丹念に描き込み、Katherine Mansfieldの作品を思い出させるような洗練された小説ではあるが、私の印象としては、なまじ文学作品を意識したために、かえってElizabeth独特の、おらかな明るさを損なっているような気がする。

それにしてもElizabethは、なぜ二度も同じ失敗を繰り返したのだろうか。しかも二度目の、さらにひどい結婚の時、彼女はもう50歳になっていた。洞察力と知性を持つ大人の女性としては、あまりに軽率すぎる結婚である。もっとも当時のドイツとイギリスの貴族階級の男子教育には、専制君主を産み出すという共通した欠陥があって、von Arnim伯もRussell伯も、爵位をもつ男としては、平均的な夫だったのかもしれない。ただ、今までの伯爵夫人なら、わが

ままた夫に我慢できたが、新しい女である Elizabeth が妥協できず、夫に抵抗したのだと考えることもできる。

しかしそれでも Elizabeth の方に全く落ち度がなかったわけではない。たとえば、彼女は伯爵というタイトルにこだわるスノップであったし、また、自伝の中で告白しているように、彼女は「愛されることを愛する」人だった⁹。E.M.Forster は、かつて Elizabeth の娘たちのティーターを勤めたこともあるが、彼もまた Elizabeth について、“To be really liked, really be liked, is probably her deepest inspiration,”¹⁰ と回想している。わがままな専制君主の夫と、愛されることばかり求める妻の結婚が、うまくいくはずもなかった。

さて Russell 伯と別れた Elizabeth は、30 才位年下の若い男たちを愛人にしていたが、最後の愛人が去った後、彼女は犬を愛し、犬の中に人間の恋人には発見できなかった絶対的な愛と献身を見出す。ドイツとイギリスの二度の戦争に心を痛め、幾多の試練にも遭遇したが、Elizabeth は常に向日性の植物のように、幸福に向かって前向きに歩きつづけ、1941 年、アメリカのカリフォルニアで 75 歳の生涯を閉じる。

4. Katherine Mansfield と Elizabeth の交遊

Elizabeth より 22 才年下の Kathleen Beauchamp は、*Elizabeth and Her German Garden* が出版された時、まだニュージーランドの女学校に通う 9 歳の少女だった。Kathleen にとって、オーストラリアで生まれて、ヨーロッパで教育を受け、ドイツ貴族と結婚して、有名な小説家となった従姉 Elizabeth は、まさに憧れの「ヒロイン」だった。

1903 年 1 月、14 歳の Kathleen は二人の姉と共に、ロンドンの Queen's College に留学する。三年間の留学中、三姉妹は何回か Beauchamp 家のパーティーなどで Elizabeth に会ったが、von Arnim 伯爵夫人はニュージーランドから来た小さな従妹たちに、何の関心も示さなかった。Kathleen の姉 Vera は、Elizabeth の冷たい態度に失望して、“We were little colonial frumps.”¹¹ と呟いた。同じ従姉妹といっても当時の Elizabeth は「雲の上の人」だった。

Kathleen は、有名な従姉の存在を誇りに思っていたが、文学の修業に関しては、一切、彼女の縁故を頼らず、独自の道を切り開いていった。1910 年、Kathleen は A.R. Orage の主宰する雑誌 *the New Age* に Katherine Mansfield のペンネームで、“A Child-Who-Was-Tired” を発表してロンドンの文壇にデビューする。1911 年 12 月、最初の短編集 *In a German Pension* を出版し、1912 年から John Middleton Murry と共に、雑誌 *the Rhythm* の編集に加わる。そして 1918 年、モダニズムの先駆けとなる小説、*Prelude* を出版し、1919 年、夫の Murry が雑誌 *the*

*Athenaeum*の編集長に指名されると、Katherine は書評欄を担当し、1919年4月4日号には、Elizabeth の小説 *Christopher and Columbus* の書評を掲載した¹²。

こうして1920年までには、作家 Katherine Mansfield の評判は Elizabeth の耳にも届くようになった。Elizabeth は、年下の従妹 Katherine のすばらしい才能に気づき、今度は自分の方から彼女に面会を申し込む。「憧れの人」だった Elizabeth から突然の申し出を受けた Katherine は、当惑と誇らしさの入り混じった感情を、友人に次のように打ち明けている。

Do you know, tho'-a thousand devils are sending Elizabeth without her German Garden to tea here tomorrow—her last time before she goes abroad into her Swiss chalet. I expect she will stay, at longest half an hour. She will be Oh, such a little bundle of artificialities—but I can't put her off.¹³

この時の出会いから、従姉妹同士の間に対等な実り多い交遊が生まれる。Katherine は、“I confess I've a great tendre for her really, more than I'd tell anybody.”¹⁴と夫に告白し、Elizabeth はこの直後から、新しい小説 *Vera* を書き始める。前述したように、これは Katherine の作品によく似た雰囲気作品である。Dorothy Brett がそのことを指摘すると、Katherine は、“Never could Elizabeth be influenced by me.”¹⁵と強く否定し、もし文章が似ているとしても、それは自分たちが同じ一族の血を引いているからであると、あくまでも Elizabeth をかばい、*Vera* に惜しみない賛辞を贈りつづけた。

1921年6月、結核の容態が悪化し、転地療養の必要に迫られた Katherine は、Elizabeth の招きに応じて、スイスに赴き、彼女のシャレーから徒歩30分ほどのモンタナ郊外にシャレー・ド・サパンを借り、夫の Murry と親友の Ida も呼び寄せ、1922年1月まで Elizabeth と親しく交遊しながら楽しい時を過ごす。1923年1月に亡くなる Katherine にとって、この半年あまりのスイス滞在は、彼女の人生の最晩年にあたるが、最も生活の安定した最も幸福な時期であった。そして、“At the Bay”, “The Garden Party”, “The Doll's House” などの代表作を次々に執筆し、作家としても最も実り多い、黄金時代であった。

繊細すぎる精神と病気の肉体をもつ Katherine は、心身ともに不安定になりやすく、現実の生活を支えていく力が乏しかった。その Katherine が、これほど集中して創作に専念できた背景には、Elizabeth の存在を見逃すことはできない。Elizabeth は文学的才能は、従妹の Katherine に及ばなかったが、ポメラニアの荒れた庭から美しい庭園を造りだし、スイスの何もない土地にシャレー・ソレイユを建ててしまうほど、たくましい生活能力を備えた女性であ

る。Elizabeth の庇護の下で、Katherine も初めて家庭の幸福を得て、「これは家庭に対して私が求める以上のものである」と、友人への手紙の中でその喜びを次のように語っている。

Our nearest neighbour—about 1/2 an hour's scramble away is my ravishing cousin 'Elizabeth.' We see her fairly often and Murry goes there. She is certainly the most fascinating small human being I have ever known—a real enchantress—and she is so lovely to look upon as well as to hear. We exchange books and flowers and fruits.... But this is more what I would like for home than anything I have known. I don't know why. There is a kind of charm.¹⁶ (Underline mine.)

色鮮やかな花々で飾られた眺めの良い家に住み、おいしい食事を楽しみ、世間の人間関係に煩わされず、静かに読書と創作に没頭する日々、そのような作家にとって理想的といえる日々を、Elizabeth は Katherine に提供し、その結果、Katherine は数々の傑作を描くことができたのである。私はこれが Elizabeth の果たした最大の功績ではないかと思う。Elizabeth 自身も、自分が Katherine を “hatched” したことを、大変誇りに思っていたようである¹⁷。

ところが、この幸福の日は長く続かなかった。Dr.Manoukhin による新しい X 線治療の噂を聞いた Katherine は、結核を治して健康を取り戻したいという強い希望に駆られて、即座にパリ行きを決意する。彼女の決意を聞いた Murry と Elizabeth は猛反対する。二人は新治療に懐疑的であったし、空気の良いスイスでの落ち着いた生活が、Katherine の健康のためにも、彼女の仕事のためにも最良の環境だと思っていたからである。

Katherine は、目の前にある幸福に満足することができず、常に、現実を越えた夢を追い求める “dreamer” であった。それは彼女を一流の芸術家にした気質であったが、その気質は彼女を不幸に追い込み、生命を縮める結果を招くものでもあった。

結局、Dr.Manoukhin の高額な治療は失敗に終わる。Katherine はさらなる奇跡を求めて、神秘思想家、Grudjjeff の研究所に入会し、フランスのフォンテーヌブローに渡り、1923年、その地で34歳の生涯を閉じる。彼女が最後に書いた手紙は Elizabeth に宛てたものだった。

Goodbye, my dearest cousin. I shall never know anyone like you; I shall remember every little thing about you for ever.¹⁸

1923年11月、Katherine の死後、Murry が編集して出版した *Poems* は、Elizabeth に捧げら

れていた。ElizabethはKatherineの作品を愛し、早すぎる死を惜しんでいたが、1927年、*Journal of Katherine Mansfield*が、やはりMurryの編集で出版された時、Elizabethは思いがけない打撃を受けることになる。Katherineは日記の中にElizabethの悪口を書いていたのだった¹⁹。

もともとKatherineは、友人と親しくなればなるほど、欠点を見つけずにはいられない性格だったので、彼女の周囲にいた人々は、皆、例外なく日記の中では、さんざん悪口を書かれていた。Katherineの愛は、誰に対しても憎悪と紙一重だったのである。現実には妥協することを知らず、深く愛するだけに憎しみも人一倍激しい彼女は、小説家としては一流だったが、周囲の人々を傷つけずにはいられない不幸な性格だった。Idaは、そのようなKatherineの欠点を理解し、悪口を書いた彼女を許して愛し続けることができたが、自分自身もわがままで自己中心的なところがあるElizabethは、Katherineの日記を読んで大きなショックを受け、この記述を省略してくれなかったMurryの不親切を悲しみ、彼に手紙を書いて遺憾の意を伝えた。Elizabethにとっては、後味の悪い友情の終わりとなってしまった。

5. KatherineとElizabethの比較

最後に、KatherineとElizabethの人生観、文学観の違いを、二人の処女作と最後の作品を比較しながら、より明確に検証してみたいと思う。

Elizabethの処女作は、*Elizabeth and Her German Garden* (1898)であり、Katherineのは、*In a German Pension* (1911)²⁰である。偶然にも両作品とも、ドイツを舞台として、恋愛と結婚に幻滅したイギリス人の既婚婦人が登場する。だがElizabethの場合は、ドイツの美しい庭園の中で、女性が幸福を見出していくのと対照的に、Katherineの作品では、醜いドイツの下宿屋で女性の幻滅と孤独は、一層深まっていくばかりである。

同じように幻滅と孤独を扱っていても、KatherineとElizabethでは、その質とレベルが全く異なる。Elizabethは家を出たが、まだ庭の中に佇んでいる。背後の家の中には、夫と3人の娘と使用人たちが控えている。夫は抑圧のシンボルであったかもしれないが、それでも彼女は、伯爵夫人のタイトルを享受していたし、娘たちの成長は喜びであったし、多くの使用人は安楽な生活を約束していた。いわばElizabethの反抗は、上流の奥様の反抗であった。

それに対してKatherineは、家を出て、庭も出て、ひとり外国の下宿屋に身を寄せる女性である。夫も恋人も母親もない孤独の中、Katherineはドイツで流産し、子供も失う。その後の半年余りのドイツ滞在中に描いたスケッチが、*In a German Pension*である。この『ドイツの

宿にて』というタイトルが示すとおり、家を出た Katherine は、生涯、家を持たず、漂泊の人生を送る。彼女は、都市を浮遊する、自由で孤独な現代女性の先駆けである。

Elizabeth and Her German Garden には、あたたかい微笑があるが、*In a German Pension* の笑いは、C.K. Stead が指摘するように、「薄氷の上を滑るようなユーモア、ヒステリーと涙と嫌悪と憎悪と紙一重の嗤い」である²¹。夫のいない身重の外国人女性に、周囲のドイツ人は好奇の眼を向ける。Katherine は、自分の傷ついたプライドを守るために、ドイツ人の俗物根性や食欲さを笑う。だがその笑いは、いつしか自分自身に向けられた自虐的な笑いとなって、彼女の孤独は一層深まる。

ドイツにおける愛と結婚の幻滅でスタートした Katherine と Elizabeth は、晩年の最後の作品では、二人とも動物への愛を描いている。Elizabeth は、*All the Dogs of My Life* (1936) の中で、今までに飼った 14 匹の犬の思い出を語り、Katherine は友人、Dorothy Brett へのギフトとして、“The Canary” (1922) を書く。しかしながら処女作の場合と同様、同じように動物への愛をテーマとしていても、二人の愛と孤独の認識には大きな隔たりが見られる。

All the Dogs of My Life は、Elizabeth の自伝を兼ねた作品だが、その冒頭は、次のような大胆な自己愛—正確に言えば、「愛されることへの愛」の告白から始まる。

I would like to begin with, to say that though parents, husbands, children, lovers and friends are all well, they are not dogs.... Dogs are free from these fluctuations. Once they love, they love steadily, unchangingly, till their last breath. That is how I like to be loved. Therefore I will write of dogs. (p. 3)

Elizabeth は、夫との死別、恋人との争いや別離、娘の死など、いくつもの不幸や悲しみに遭遇するが、その都度、忠実な犬たちの献身的な愛によって立ち直る。彼女の人生と文学のテーマは、過去の悲しみではなく、新しい幸福の追求である。だから、愛犬の死を悼み悲しみに沈むよりは、常に、新しい犬との交遊に喜びを見出す。「昔の悲しみを考えたり、書きたいと思う人がいるだろうか。悲しみは傍らに置いて、静かに蓋をしよう。悲しみから教訓を得たなら、それに背中を向けて、まだ残っている幸福に向かって顔を上げよう。」(p. 143) 彼女のモットーは、「人はいつでも微笑することができる」、又は「世界には多くの素晴らしいことがある。私にできる最善のことは、もう一度、それらを探求することである。」(p. 161)

この作品の最後で、彼女は執筆当時飼っていた犬、Chunkie について語る。「彼はどのような敗北の後でも、すみやかに適切な精神状態で人生に立ち向かっていく。」そして適切な精神

状態とは、「Chunkieのように、自分の受け持ちを十分に果たし、最後まで陽気に尻尾を振りつづけることである。」さらに「自分の持っていないものを嘆くよりは、自分の持っているものを最大限に利用する賢い犬」に恥じない生き方をしよう、誓いを立ててこの作品は終わる。「犬に恥じない生き方」というのは、Elizabethらしい人を食ったような大胆でユーモラスな表現である。文学作品にしては、少々、単純で健康的すぎる感じもするが、それでも彼女の作品を読むと、何となく、勇気づけられるような気がするの確かである。

Katherine Mansfieldの“The Canary”は、*All the Dogs of My Life*とさまざまな点で対照的である。“The Canary”のテーマは、Elizabethにとっては何の価値もないと思われた、「過去の悲しみ」、つまり死んだペットへの哀惜の物語である。

「あの大きな釘が見えますか」という、老女の問いかけで作品は始まる。老女のカナリアは既に死んでいて、鳥籠も片づけられ、今はその鳥籠を掛けていた一本の釘だけが残されている。老女は、そのカナリアを愛しすぎていて、新しい鳥を飼うことができない。「私は今でも、その釘を見ることもできないし、引き抜くこともできない」と言う老女にとって、壁に打たれた釘は、彼女の心に刺さったトゲである。釘はカナリアへの愛を思い出させ、喪失の痛みで彼女の心を刺す。しかし彼女は釘を引き抜くことができない。最愛のカナリアを失った今、彼女は喪失の痛みにすがって生きている。たとえ痛みであっても、それは愛の証だからである。老女の愛は、Elizabethの犬たちへの愛にくらべると、はるかに複雑で深い愛である。

...I loved him. How I loved him! Perhaps it does not matter so very much what it is one loves in this world. But love something one must!²²

「でも人は何かを愛さなくてはならないのです」という老女は、「愛されることを愛する」というElizabethより、はるかに成熟した愛についての認識をもっている。Katherineは犬を飼わなかったが、彼女には、犬よりも忠実で献身的な愛を捧げてくれる親友のIda Bakerがいた。IdaはKatherineに惜しみない愛を注いでくれたが、Katherineは愛されるだけでは満足できなかった。愛されるだけの空しさを、Katherineはよく知っていたのである。

作品の最後は、「どんなに陽気なカナリアの歌声の下にも、“something sad in life”が聞こえる」という、老女の告白で終わる。透徹した洞察力をもつKatherineは、明るく陽気な日常生活の背後に、深い悲しみの翳りを見通す。「犬に恥じない生き方」を誓うElizabethとは著しい違いである。言い換えれば、Elizabethは、日常生活の中に幸福を作り出す能力をもち、Katherineは日常の幸福の彼岸を見通す芸術家の眼をもっていたと言えるだろう。

Raymond Mortimer は、Elizabeth は “a brilliant amateur” であったが、Katherine は “a born professional always intent upon improving herself as an artist”²³ と定義した。Katherine が自分の生命を削って描いた作品には、Elizabeth には決して到達できない、不滅の水晶のような透徹した硬質の輝きがある。では、現代において、Elizabeth を読む価値は何かと問われれば、アマチュア特有の暖かさと、少々鈍感でもたくましく生き抜く力に勇気づけられることだろうか。それにしても、Katherine と Elizabeth、同じ一族の血を引く従姉妹の対照的な文学観と人生観から、芸術家であることと生活者であることのギャップの大きさを、改めて考えさせられた次第である。(2000年10月)

Notes

- 1 von Arnim, Elizabeth. *Elizabeth and Her German Garden*, 1898, rpt. Virago Press, 2000.
- 2 Virago Modern Classics は、女性作家の再発見を重視したシリーズである。「後書き」には次のような抱負が書き添えられている。“Its aim was, and is, to demonstrate the existence of a female tradition in fiction, and to broaden the sometimes narrow definition of a ‘classic’ which has often led to the neglect of interesting novels and short stories...”
- 3 Usborne, Karen. *‘Elizabeth’: The Author of Elizabeth and Her German Garden*, The Bodley Head, 1986.本文中、Elizabeth の伝記的記述は、主としてこの文献を参照した。
- 4 Miller, Jane Eldridge. *Rebel Women: Feminism, Modernism and the Edwardian Novel*, Virago Press, 1994, p. 76.
- 5 von Arnim, Elizabeth. *All the Dogs of My Life*, 1936, rpt. Virago Press, 1995, p. 77.
- 6 Von Arnim, Elizabeth. *Vera*, 1921, rpt. Virago Press, 1983.
- 7 Russell, Bertrand. *The Autobiography of Bertrand Russell*, vol.2, George Allen and Unwin Ltd., 1986, p. 154.
- 8 Mansfield, Katherine. *The Collected Letters of Katherine Mansfield (CLKM)*, vol.4, ed. Vincent O’Sullivan & Margaret Scoot, Clarendon Press, 1996, p. 309.
- 9 *All the Dogs of My Life*, p. 3.
- 10 1903年、メモワール・クラブで行なわれた E.M. Forster の講演は、後に彼の伝記に収録された。Furbank, P.N. *E.M.Forster: A Life*, Secker & Warburg, 1979, p. 131.
- 11 Alpers, Antony. *The Life of Katherine Mansfield*, Viking Press, 1980, p. 34. 本文中の Mansfield の伝記的記述については、他に次の二つの文献を参照した。Tomalin, Claire. *The Life of Katherine Mansfield*, Alfred A.Knopf, 1988. および、Meyers, Jeffrey. *Katherine Mansfield*, A New Directions Book, 1978.
- 12 Mansfield, Katherine. *Novels & Novelists*, ed. John Middleton Murry, Constable, 1930, pp. 5-7.
- 13 *CLKM*, vol. 4, p. 13.
- 14 *Ibid*, p. 101.
- 15 *Ibid*, p. 346.
- 16 *Ibid*, p. 254.

- 17 Usborne, p. 258. She wrote that “Love and respect had grown up between them equally, although Katherine was the only person Elizabeth was afraid of But their pride in each other was their most evident emotion—Elizabeth felt that she had hatched Katherine, which in a way she had, ...”
- 18 Mansfield, Katherine. *Letters and Journals of Katherine Mansfield*, ed. C.K. Stead, Penguin Books, 1977, p. 285.
- 19 Mansfield, Katherine. *Journal of Katherine Mansfield*, ed. John Middleton Murry, Constable, 1927. この中で Katherine は, Elizabeth を “a vulgar little mind” (p. 187) と呼び, “No, she is not my friend.” (p. 214) と書いていた。
- 20 Mansfield, Katherine. *In a German Pension*, 1911, rpt. Penguin Books, 1987.
- 21 Stead, C.K. *In the Glass Case. Essays of New Zealand Literature*, Auckland University Press, 1981, p. 31.
- 22 Mansfield, Katherine. *The Stories of Katherine Mansfield*, ed. Antony Alpers, Oxford University Press, 1984, p. 539.
- 23 Mortimer, Raymond. “Elizabeth & Her Doting Dogs: Reviewing her Biography,” *Sunday Times*, 9 November, 1958.